

月曜経済

やまなし
百年企業

(8)

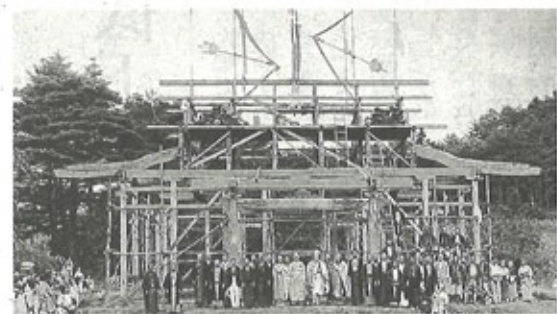
恵林寺、放光寺など現在の甲州市にある寺社の普請をしたことをきっかけに、江戸時代後期に甲州市にも拠点を設けたとみられる。

再び注目集まる

平安時代に築城に関わったという記録が残る石川工務所(甲州市)は、身延町下山区を拠点にした職人集団「下山大工」の流れをくむ。向嶽寺や恵林寺(いずれも甲州市)、久遠寺(身延町)、甲斐善光寺(甲州市)の関連施設など伝統的建築物の工事を手掛けた。平成に入ってからには古民家や擬洋風建築の工事に幅を広げ、石川重人社長(64)は「長年、継承してきた技で日本の古き良き文化を残し、伝えたい」と意気込む。

重人社長の先祖は平安時代の1156年に現在の山梨市牧丘町西保中に、源平合戦で功績を残した甲斐源氏の有力武将安田義定の保田山城の築城に携わった、と伝わる。その後も県内各地に現在も数多く残る文化財指定の建築物を手掛けたとされる。向嶽寺や

江戸時代後期の大火で焼けた甲斐善光寺の再建工事も手掛けた。「ものすごい難工事だったのだろう」(重人社長)という工事は再建までに30年以上を費やし、物事の進みが遅いことの例えに「善光寺普



石川工務所が手掛けた円通寺本堂の上棟式に参加する寺関係者と同社の大工
|| 身延町内(1930年代)

した暮らしにも目を向けるようになり、伝統的な建築に再び注目が集まった。「父の決断は正しかった」と話す。

防火耐震へ思い

重人社長は会社のキーワードとして、「匠の技を伝える学舎」の意味を込め、「伝匠舎」を掲げる。「昔ながらの建物の

工事には経験と知識、技術がいる。伝統的な工法を守ってきたわれわれにしかできない」と力を込め、伝統的な建築物やそれを守るための技術を

匠の技と誇り 守り継ぐ

石川工務所 1918(大正7)年設立

請」と言われるようになったという。

大正期の1918年に、祖父の孝重氏が石川工務所を設立。太平洋戦争などの動乱期

【社名】伝匠舎石川工務所

【代表】石川重人

【設立】1918(大正7)年

【業務内容】寺社建設工事、

文化材建造物修理工事、古民

家再生工事、住宅建築工事な

どの施工や企画・設計業務

【本社所在地】甲州市塩山上

於

【電話番号】05563(32)

2170

を乗り越えた同社だが、戦後の高度経済成長期から平成のバブル経済にかけて、日本は建築技術の革新や家屋の洋風化が進み、木造建築が減少。伝統的な工法を続けるのか、新工法を取り入れるのか。当時社長だった允重氏(重人社長の父)は、「伝統技法を守ることを選んだ。」

後世に伝えることが課せられた使命だと考えている。かつては一般民家に多く見られたかやぶき屋根や、西洋の建築を取り入れた擬洋風建築の工事も修繕などにも業務の幅を広げた。「寺社や文化材と合わせて、これらも残すべき日本の誇りだ」と語る。

今年の目標に「伝匠舎もつたない長生き建築」を掲げ、「一品入魂」や「伝匠技法」、「防火耐震」など五つの項目を設けた。沖繩・首里城の火災などを踏まえて特に防火耐震への思いは強く、「歴史的建築物の焼失が相次ぎ、心を痛めている。伝統的な技術は守りつつ、防火につながる工法も考えたい」と語る。

あの時

【大正】石川重人社長の祖父孝重氏が、甲州市に法人を設立した。

【昭和】技術革新が進み相次いで新工法が生まれ、経営が苦しくなる中、伝統的な工法を守り続けたこと。

【平成】日本の伝統的な建築物を守るため、古民家再生工事やかやぶき屋根工事といった新事業を始めたこと。

|| 毎月第3月曜日に掲載します。次回は3月16日の予定です。

〈小池直輝〉



石川工務所の社屋＝甲州市塩山上於曾